

THREは84/88/91/92%と有意に低かった。一秒量でも、TTEで80/86/88/85%に対し、THREは95/96/98/93%と有意に低かった。血液ガス、六分間歩行試験では有意差を認めず、呼吸器QOLではTHREがTTEに比べて高い傾向にあった。

【考察】THREは呼吸機能の低下が小さく、回復も良好である。

26 胸部食道癌根治術後再発症例の臨床病理学的検討

中川 悟・藪崎 裕・梨本 篤
土屋 嘉昭・佐藤 信昭・瀧井 康公
野村 達也・丸山 聡・神林智寿子
金子 耕治・田中 乙雄

県立がんセンター新潟病院外科

【目的】胸部食道癌根治術後の再発例を検討し、再発の特徴と危険因子について考察する。

【対象】2008年12月までに胸部食道癌にてR0手術が施行された134例を対象とした。

【結果】134例中55例(41%)に再発を認めた。非再発例と比較して再発例では有意に深達度は深く、リンパ節(LN)転移と静脈侵襲(v)の陽性例が多く、進行例が多かった。再発形式は、局所再発19例(郭清内LN15例、吻合部3例、縦隔再発1例)、遠隔再発36例(血行性16例、郭清外LN10例、血行性+郭清外LN2例、局所+遠隔同時再発7例)であった。遠隔再発例では局所再発例より有意にLN転移個数が5個以上の症例が多く、無病期間が短かった。

【結語】胸部食道癌における再発危険因子としては、深達度、LN転移、v陽性及び進行度が重要である。特にLN転移個数が5個以上の症例では早期に遠隔再発を来し易いため、厳重な経過観察が必要である。

27 胸部下部食道・食道接合部癌に対する経裂孔的根治的食道切除術の治療成績

神田 達夫・鈴木 力*・小杉 伸一
西巻 正**・矢島 和人・坂本 薫
松本 淳・畠山 勝義

新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科学分野
新潟大学医学部保健学科*
琉球大学医学部第一外科**

【目的】教室では、頸部・上縦隔郭清を省略した経裂孔的アプローチによる根治的食道切除術を1994年より胸部下部食道癌に対して行ってきた。本術式の治療成績を報告する。

【患者】2006年12月までに本術式を行った胸部下部食道・食道胃接合部癌患者54名。

【選択基準】術前診断で腫瘍の局在が下部食道に限局し、臨床的に縦隔リンパ節転移陰性と診断された症例。平均年齢は65歳(35~83歳)。

【成績】53名において根治切除が行われた。手術時間と出血量の中央値は288分、508mlであった。24時間以上の呼吸器管理を要したものは4名(7%)のみであり、呼吸器合併症は5名(9%)と低率であった。在院死は認めていない。全54名の累積5年生存率は51%であり、開胸食道切除術と同等であった。

【結論】経裂孔的根治的食道切除術は、安全で周術期管理を容易にする。長期成績も開胸手術に劣らず、胸部下部食道癌手術の一選択肢になると思われる。

II. 特別講演

食道癌診療のエビデンスとプラクティス

大阪大学大学院医学系研究科
消化器外科学 教授

土岐 祐一郎